三個のオレンジ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三個のオレンジ

【Ｎコード】
Ｎ１３４９Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
寒いロシアにいるカップル。その寒いロシアからイタリアに旅立ちそこで見たものは。かつてスターリンが言った言葉とオペラがヒントになりました。

第一章

三個のオレンジ

ロシアは寒い。それも異常に寒い。

その寒さはあまりにも有名だ。従って憧れる場所は暖かい場所だ。従ってバナナはない。パイナップルもない。そんなものはまさに夢のものだ。

「我が国にはバナナ以外何でもある」

かつてスターリンはこう豪語した。言い換えればバナナはないのだ。

酒はある。元々ロシア人は無欲である。家と仕事とウォッカがあればそれで満足だとさえ言われている。無欲で素朴で親切な人達だとよく言われている。

しかしその彼等でも憧れはある。ソ連が崩壊してから持ち前の尋常ではない体力と生命力と回復力で見事に復活した。その中でだ。

モスクワのあるレストランの中でだ。金髪に碧眼、しかも白い肌の見事なスラブ美女が向かい側にいる背の高いこれまた金髪碧眼の青年に対して言うのであった。

「オレンジないかしら」

「オレンジ？」

「そう、オレンジ」

それはないかというのである。

「食べてみたいけれど」

「最近オレンジじゃなくてバナナも手に入らないかい？」

しかし相手の青年はこう言うのであった。

「果物さ。他の国が輸出してくれるから」

「まあね。それはね」

流石に今はそういうものも食べられるようにはなっている。時代は変わっているのだ。

「なってるけれどね」
「じゃあいいじゃないか」
「違うのよ。もっとね、何かね」
「何か？」
「新鮮なみずみずしいオレンジが」
それがだというのだ。
「そういうのが欲しいけれど」
「みずみずしいねえ」
「一旦凍らせたのとかじゃなくて。もっと新鮮で。船で運んだのじゃなくて」
「随分贅沢なことを言うな」
青年は彼女のその言葉を聞いてだ。ピロシキを食べながら言った。
二人が食べているのはそのピロシキにボルシチだった。典型的なロシア料理である。
「そんな。新鮮なオレンジなんて」
「ドイツとかは普通に食べてるみたいね」
「イタリアから輸入してね」
隣の国である。その分だけ新鮮なものが来るというわけだ。
「そうしてね」
「それが羨ましいのよ。ねえイワノフ」
「何だい、ソーニャ」
ここで二人の名前を呼び合う。
「オレンジ食べたいけれど」
「そのオレンジだよね」
「どうかしら」
ピロシキを食べながらの言葉だ。
「新鮮なオレンジね。いいと思わない？」
「じゃあイタリア行くとか？」
「あっ、余計にいいわよね」
また言うソーニャだった。笑顔になっている。

「イタリアね。空が青くて澄んでるらしいわね」
「空が青くて澄んでいる」
それを聞いてであった。イワノフの顔が晴れやかになった。青い空と聞いてだ。
「凄いね、それって」
「そうでしょ、凄いって思うでしょ」
「ロシアにはそんなのは」
「滅多にないからね」
「雪ばかりだからね」
ロシアといえば雪である。このモスクワにしてもそれは同じだ。空は常に重苦しい暗灰色であり一年の殆どが雪に覆われている。その彼等にとってイタリアはだ。
そこの青い空と聞いてだ。イワノフは目を輝かせていた。そうしてである。
「それだったら」
「どう？乗る？」
「乗らないでいられないよ」
腕を組んで言った。
「もうね。そうだ」
「そうだ？」
「旅行に行こうか」
こうソーニャに言うのである。

第二章

「旅行にね。その時にね」
「その時になの」
「そうだよ、行こうよ」
また言うのだった。
「イタリアにね」
「それでオレンジをなのね」
「またオレンジなんだ」
「だから。新鮮なオレンジよ」
それを切望しているかの様だった。そのうえでの言葉だった。
「それを是非ね」
「オレンジ以外にも色々とある国だけれどね」
「まあね。パスタにトマトにアボガドに」
どれもイタリアの象徴だ。寒いロシアにとってはイタリアはまさに憧れである。そしてその料理や食べ物もだ。その青い空の象徴にもなっているのだ。
「それに生ハムにチーズにね」
「何でもあるじゃない」
「けれどやっぱりオレンジよ」
ソーニャはそれは外せないというのである。イワノフはその彼女を言葉を聞いてふと思った。だがそれは今は言わないのだった。
「オレンジが食べたいのよ」
「わかったよ。それじゃあね」
「オレンジね」
「お金丁度貯まってるし」
「私もよ」
旅に必要なのはまずは金である。だが二人共それはあるというのだ。ロシアはまた力をつけてきている。それで彼等もそれだけの豊

かさを身に着けてきているのだ。
そしてだ。さらに話すのだった。
「それじゃあ」
「後は時間を見つけてね」
そのうえで行くことにしたのだった。そのイタリアにだ。まずはローマに着いた。二人はそこで最初に驚いたことはというとだ。
「うわ、暑いな」
「というかこんなに暑い場所ってあったの」
ローマに着いてすぐにその暑さに驚いたのである。何しろモスクワから飛行機ですぐに来たのだ。モスクワの寒さとは全く違っていた。
最初にその暑さを感じて驚いた。しかし決してまとわりつくものではなかった。
あっさりとしているのだ。その暑さがだ。さらりとした感じである。そしてだ。
空港から出るとだ。その上にあったものはその青い空だった。晴れやかな青空が広がっている。そこにある白い雲も見事な白だ。
二人はその青と白を見てだ。あらためて驚いて言ったのである。
「ねえ」
「そうだね」
イワノフは空を見上げたままソーニャの言葉に頷く。彼女も空を見上げている。
「こんな奇麗な青空ははじめて見たよ」
「ええ。イタリア人はいつもこんなに青い空を見ているのね」
「親父が昔言っていたけれど」
イワノフは今度は自分の父の話をした。
「キューバってさ」
「キューバね」
「あの国も凄く奇麗な青い空でね」
かつて、ソ連の時代はキューバへの観光旅行は最高のプレゼント

だったのだ。その極寒のロシアにとって常夏のキューバはまさに楽園なのだ。
「それで海も宝石みたいでね」
「そんな国なの」
「今度お金ができたらキューバに行く？」
「難しいけれどね。あそこまで行くお金を貯めるのは」
「そうだね」
ソーニャは彼の今の言葉には苦笑いだった。そんな話をしながらローマの街に出る。ローマは明るい日差しの中で笑顔の市民達や観光客達がいてだ。歴史そのものと言ってもいい様々な遺跡や建造物があった。二人はその中であるものを見た。
それはトレビの泉だった。二人はその前に来てだった。あの映画の話をするのだった。
「アメリカ映画ってのが癪だけれど」
「まあ仕方ないわね」
また苦笑いになる。ロシアとアメリカの仲は悪い。ついでに言えば中国とも日本とも悪い。しかしイタリアは好きだったりする。それがロシアだ。
「それはね」
「そうだね。それでここに来たら」
「これね」
「そう、それ」
イワノフは彼女がコインを出してきたのを見て笑顔で頷く。そして彼もそれを出した。

第三章

そうしてだ。そのうえであらためて言うのだった。
「あの映画と一緒にね」
「やりましょう」
二人はそのまま泉に背中を向けた。そのうえで泉にコインを投げ入れた。そうして笑顔で向かい合ってそのうえでまた話をした。
「またこの国に来られるようにね」
「お祈りして」
その為に投げ入れたのである。二人はあの映画のことを思い出しながらそうしたのだ。
そしてだ。今度はレストランに入った。そこで片言のイタリア語で店の洒落た服と明るい笑顔のウェイターと応対して彼の勧めるメニューが来るとだ。二人は大いに驚いた。
「な、何これ」
「イタリアではスパゲティにインクをかけて食べるの！？」
最初に出て来たそのスパゲティを見て唖然となる。何とそのスパゲティは真っ黒なのだ。そしてスパゲティと一緒に入っている何か硬いものがあった。黒い中に白い身を見せているそれも気になった。
驚いて屋外の白い席で声をあげているとだ。そのイタリア人のウェイターが何とロシア語で言ってきたのである。
「ああ、これはですね」
「あっ、ロシア語話せるんですか」
「そうだったんですか」
「そうです、ローマは色々な国から観光客が来ますので」
だからだというのだ。笑顔で話すのだった。実際にローマは観光都市でもある。多くの国から観光客達が来てそれで賑わっているのである。
「最近ロシアからの方も多いですし」

「だからですか」
「それで」
「そうです。それでですが」
ウェイターはあらためて二人に話してきた。
「そのパスタですが」
「はい、それです」
「どうしてインクをかけてるのですか？」
「インクではなく烏賊の墨です」
それだというのである。そしてだ。
「烏賊の身も入っています」
「烏賊の墨！？」
「それに烏賊を食べるのですか」
「はい、イタリアではそうです」
目を点にさせる二人にまた笑顔で話してみせたウェイターだった。
「海の幸も豊富ですので」
「何と」
「それでなんですか」
「はい、美味しいですよ」
味についても保障するのだった。
「ですからどうぞ」
「わかりました」
「それでは」
二人はそれに頷いてだった。実際にそのスパゲティを食べてみる。するとそれは確かに美味かった。二人がはじめて食べる味だった。
そしてその後の料理もだ。どれも二人にとってははじめて味わうものだった。デザートのタルトまで最高だった。
「サラダにスープもね」
「そうよね。野菜がふんだんに使われていて」
二人は最後のチーズのタルトを食べながら話をしている。その顔は満足しているものである。

「凄く美味しいわね」
「それにだよ」
イワノフはここでさらに言った。
「オリーブが」
「ええ、物凄く多量に使っていて」
「これがイタリアなんだ」
「イタリアはオリーブですよ」
またウェイターが気さくに言ってきた。
「これとガーリックがなければイタリアではないですから」
「話には聞いていたけれど」
「いいなあ、この味」
「そうよね」
二人で目を輝かせてのやり取りだった。彼等はもうイタリア料理に魅了されていた。そしてイタリアにもだ。ローマの様々な観光地を回ってた。
審判の口に手を入れる。そこでソーニャは笑いながら言うのだった。
「嘘吐きは食い千切られるのよね」
「だったら世の中の人間皆そうだよ」
イワノフは笑って彼女に返した。

第四章

「だってさ、皆生まれてから死ぬまで一度は絶対に嘘を言うからね」
「だからなの」
「そうだろ？子供の頃一度は嘘吐くじゃない」
「確かにね」
言われてみればそうだった。そして今もだ。ソーニャはそのことを思い出して話していた。
「それはね」
「僕だって嘘吐いたことあるよ」
イワノフは少し真剣な顔で言った。
「一度はね」
「そうだろ？あるだろ」
「そういうことなのね。じゃあ私は」
「すぐに抜かないと大変なことになるよ」
「そうね、嘘吐きだから」
笑いながらそんな話をしていた。そんな話を続けていた。そしてだ。今度は市場に入った。観光客達だけでなくローマの市民達も行き交っている。恰幅のいいおばちゃんや気さくな笑顔のおじさん達が店の中で威勢のいい明るい声で客を呼んでいる。イタリア語であるがそれでも何となく言っていることはわかる。
その中を歩きながらだ。ソーニャは隣にいるイワノフに対して言うのだった。
「こうしたところはモスクワと同じね」
「そうだね」
満足した笑顔で頷くイワノフだった。左右に人が行き交っている。物は色々だ。その中には烏賊もある。あの烏賊だ。それにだ。
それを見てだ。今度はイワノフからソーニャに言った。
「ねえ」

「どうしたの？」
「ほら、あの烏賊も売ってるし」
「ええ、本当にイタリア人って烏賊食べるのね」
「蛸もあるし」
見ればそれも並んでいた。赤い身がそこにあった。
「蛸も食べるんだね」
「美味しいのかしら」
「日本人は食べるらしいけれどね」
イワノフがここで日本人の話を出した。
「あの人達もね。ほら」
「あっ、本当ね」
アジア系と思われる一組の男女が笑顔でその蛸達に寄っていた。それは完全に御馳走を見ている顔だった。食べ物と認識しているのは明らかだ。
「あれ日本人だよね」
「そうよね。それか中国人か」
「あの言葉は日本語だよ」
言葉の調子からそれを察したのである。
「だからね」
「だからなの」
「そうだよ。日本人は蛸を食べるからね」
「美味しくなければ食べないってことね」
「そうじゃないかな。まあロシアじゃね」
「ええ、ちょっとね」
そんな話をしていた。やがて野菜や果物のある場所のところに来た。するとだ。

第五章

そこにはイタリアの新鮮な果物達もあった。
その中にはオレンジもあった。ソーニャがそのみずみずしいオレンジを見た。
「これこれ」
「オレンジだね」
「これが食べたかったのよ。ほら」
そのうちの一個を手に取るとだった。モスクワにはないような新鮮なオレンジだった。それを手に取ってイワノフの前に出してきたのだ。
「このオレンジ。モスクワのとはもうね」
「凄い新鮮だよね」
「絶対に美味しいわよ、これ」
明るい笑顔でイワノフに言う。
「甘くてね。水分もたっぷりあって」
「そうだよね。それじゃあ」
「食べましょう」
ソーニャは早速イワノフにこう勧めた。
「一個ずつ買ってね」
「一個ずつじゃないよ」
しかしだった。イワノフは真剣な顔でだ。ここでこう言ったのだ。
「三個だよ」
「三個なの」
「そうだよ、三個だよ」
こうソーニャに話す。
「三個買おう」
「どうしてなの？」
ソーニャは目をしばたかせてイワノフに問い返した。

「どうして三個なの？一個多いけれど」
「別に渡すけれどね」
「別に？」
「ただ、もうそろそろいいかなって思うし」
イワノフの言葉は今は回りくどいものだった。しかしそれでも言うのだった。
「だからね」
「だからって」
「指輪の前に。その代わりにね」
「指輪・・・・・・」
「そう、いいかな」
こう言うのである。
「それで。いいかな」
「オレンジでなの」
「後で。モスクワに返ったらまた渡すけれどね」
イワノフの言葉は続く。今は顔を赤くさせている。
その赤くさせた顔でだ。彼は話すのだった。
「それでも今はね」
「このオレンジを」
「どうかな、その為のオレンジ」
またソーニャに告げた。
「貰ってくれるかな」
「ここで言われたら」
そのソーニャの返答である。
「ちょっと」
「ちょっと？」
「断れないじゃない」
苦笑いと共に出した言葉だった。
「元々そのつもりはなかったけれど。そろそろだって考えてたし」
「そうだったんだ」

「オレンジね」
また問うのだった。
「そうよね、オレンジが」
「君がずっと欲しかったその新鮮なオレンジをね」
「わかったわ」
ソーニャはここで頷いた。
「それじゃあね」
「貰ってくれるかな」
「勿論よ」
笑顔で応えるソーニャだった。
「指輪にしては何か色気がないけれど」
「それはモスクワに帰ってからじゃない」
「ふふふ、そうね」
イワノフのその言葉にまた笑顔で応える。
「そうだったわね」
「そうだよ。それじゃあこれをね」
そのオレンジが差し出された。まさに今採れたばかりのだ。新鮮でみずみずしい、モスクワにはないようなオレンジがだ。彼女に差し出されたのだった。
ソーニャもそれを受け取ってだ。そのうえで言うのだった。
「有り難う」
「受け取ってくれたね。じゃあ後は」
「二人で食べましょう。それじゃあね」
「うん、このオレンジをね」
「一緒にね」
笑顔で言い合う二人だった。そしてそのオレンジを食べた。それは新鮮さよりもみずみずしさよりもだ。もっと別の味がしたのだった。

三個のオレンジ　完

2010・5・9

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1349o/

三個のオレンジ

2010年10月8日12時12分発行